

令和3年度 真壁城跡中城庭園の調査

主催 桜川市教育委員会

史跡真壁城跡と調査の目的

- 内容** 真壁氏累代の居城（室町～安土桃山時代）
- 場所** 桜川市真壁町古城・山尾。筑波山塊から西にのびる舌状台地上に立地。
- 指定** 平成6年（1994）10月28日（国史跡）
- 調査** 平成9年（1997）に遺構の保護や史跡整備のための調査を開始し、二の丸・中城・外曲輪で調査を実施。現在は中城庭園の全体像解明を目指して調査を継続中。



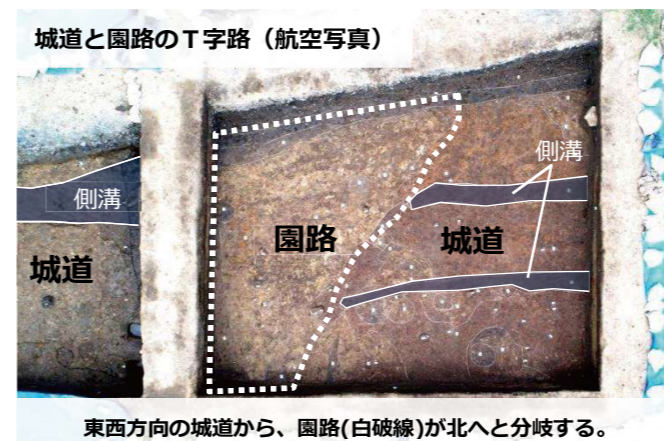
これまでの中城庭園の調査成果

- 中城庭園の発見**
平成16・17年度（2004・2005）に大規模建物群や舞台状建物、茶室、池などの跡を確認。これらは迎賓館的な役割の建物群と茶庭（茶室にとまなう庭園）と考えられ、第17代真壁久幹・第18代氏幹の時期（1550～1602年頃）のものだと判明。
その後の調査でも池や水路、茶室などを確認し、庭園の広がりが大規模なものであることも判明。

- 庭園の規模は県内最大**
この時期の城郭庭園の遺構が残るのは全国でも希少。しかも庭園の面積は全体で7,000～8,000㎡（プロサッカーコート以上）、池跡が約1,500㎡と大規模。そこから出土する遺物も膨大な量かつ良質。

- 庭園内の出土遺物**
計10万点を超える土器・陶磁器などの破片が出土。大規模建物群などで繰り返し酒宴が行われたためか、遺物のほとんどが酒杯（かわらけ）。他に、茶室などで使用されたと考えられる茶道具や香道具（香炉や香箸）、遊び道具（基石やすごろくの駒）なども出土。
茶道具は天目茶碗に代表される中国産・瀬戸美濃産の茶器や中国産の染付磁器などが出土。

- 城道と園路の分岐点を確認**
城道とは城内を行き来するための通路のこと。園路は路地ともいい、庭園内の通路のこと。
今回の調査で園路の始まり（＝庭園の入口エリア）の部分を確認した。園路は東西に走る城道から北へ分岐しており、下の写真のような状況であることが判明。城道には側溝が取り付けられ、園路は路面に粘土が敷かれていた。分岐点の園路の幅は2.5mほど。
園路は城道から分岐して庭園エリアへ入り、南北を貫く一方、各茶室や大型建物など複数に枝分かれし、総延長は120mに及ぶ。また、路面には砂敷きや玉石敷き（延段）の部分や、補修が加えられたと思われる部分もあった。
全体としては庭園内に張り巡らされた園路が、丁寧に維持管理されていた状況が見られる。
ほかにも園路から延びる飛石跡や建物跡なども見つかっており、園路と周辺の遺構との関係が明らかになりつつある。



- 池（庭園）から駐屯地（軍事施設）へ**
南部エリアの池跡は、昨年度の調査で当主が真壁久幹の時期（1550～1575年頃）に造成され、息子の氏幹の時期（1575年頃～1602年）には埋め立てられた可能性が高いことが判明した。
今回の調査では、池跡の西端が判明し、その規模が東西22m×南北11mとなり、おおよそ全体の規模を把握することができた。
埋め立てられた後の池の場所はどうなったのか。
調査区内では酒杯や茶器のほか、釘と思われる鉄製品や火縄銃の玉などが出土。今回の調査では新たに大筒の玉（直径約3cm）と思われる遺物も出土した。下の写真の遺構は中央に赤く焼けた土が集中し、小規模だが強い火を扱った可能性が高い。これらのことから、池以後は戦いに備える道具を製作していたことが考えられる。氏幹の時期の目立った遺構が見つからないことから、庭園から鍛冶場を備えた駐屯地へと場の使い方が変更されたと想定できる。

